

NPO 法人まちと学校のみらい

竹 原 和 泉*

まちの未来、子どもの未来のために、中高生の地域活動をサポートするという活動についてご説明したいと思います。

その前に、自己紹介をさせていただきます。大学時代教育学科の社会教育の稲生ゼミで学んだことが私の人生を変えました。入学時は初等教育を学びたいと思っていましたが、1年の夏休みに、岩手県の漁村で、子どもたちと体験活動をしたり、地域でボランティア活動した経験から、学校の外にも素晴らしい学びの機会があることを実感、社会教育を学び始めました。

その体験が、現在の活動につながっています。卒業後一般企業でつとめた後、夫の転勤にともない、フランスで出産、子育てをし、社会が子どもを育てることを知り、アメリカではPTA活動やボランティア活動をして学校と地域のつながりを知る機会がありました。

帰国後46歳のときに、横浜市社会教育指導員として公募で採用され、その後横浜市教育委員会生涯学習課で18区の社会教育関係職員のバックアップ・研修にかかりました。さらに平成17年からは神奈川県初のコミュニティ・スクールの立ち上げにかかわるとともに、中学校内に併設されたコミュニティハウス館長を11年間つとめました。

大学で学んだこと、学校の外で学んだこと、そして海外で子どもを育てたり、ボランティア活動をしたこと、すべてが今の私をつくっていると思っています。NPOを立ち上げたことも、まちづくりのコーディネートをしていることも、文部科学省中央教育審議会等の委員とし

て、市民の立場から教育改革にかかわらせていただいていることも、そこからスタートしています。

まちづくりについて申し上げますと、私たちのNPOで学べることは、一つの地域、一つの事業に深く関わることです。人とコミュニティがどのようにつながっていくか、人と人・組織・商店街や企業が、どのようにつながっていくか、体験的に学べます。多くの出会いがあると思いますし、思いがけない学びがあると思います。コミュニティがつくられていくプロセスを体験的に学びたい方をお待ちしております。

そして、今のコロナ禍の中で何ができるか、リモートでもリアルでも活動が継続できるような工夫をしていきたいと思っています。それは誰もが経験したことのないことにチャレンジすることになりますが、一緒に動いていきたいと思っています。

NPO法人まちの学校とみらいは、子どもの未来のために、そしてまちの未来のために動いているコーディネート機関、中間支援組織です。具体的には、「学校と地域」「まちづくり」等のシンクタンク機能を持ち、調査研究をし、各地で研修等を行っています。ローカルには、横浜市青葉区を中心に青少年の地域活動をサポートしています。

青葉区は東急田園都市線沿線を中心に、まちづくりがすすめられた地域で、現在高齢化がすすんでいます。開発直後に移り住んで方はたは、自分のまちだ、自分たちがまちを創ると意気込み、地域活動が次々うまれましたがその後移り住んだ方の中には、サービスを提供される

* NPO 法人まちと学校のみらい代表理事

消費者のような感覚になる方もでてきます。

本来、まちづくりは皆でしていくものですね。良いまちにするために何ができるかという感覚を持ってほしいと思っています。行政だけが、まちづくりをするわけではありませんので、みんなでまちをつくる、持続可能なまちをつくっていく、そして、大人がするのを見ながら、子どもたち、中高生もまちづくりの担い手になっていくようにお願い「市ヶ尾ユースプロジェクト」をスタートしました。

そのような活動の中で、大学生の存在はとても大事です。つまり、小中高生と大人をつなぐのは大学生です。子どもたちにとっては、メンターの役割を果たしますし、大人にとって、高齢者の方もいますし、地域の商店街の人にもいますが、そういう人たちにとっては、元気を与えてくれるのが大学生です。ですから、皆さんの活躍、参画を期待をしています。

この活動では中高生の「課題意識」からスタートします。まず、自分がどういう問題意識

を持ってるか自らに問います。例えば、ごみの問題、防犯の問題、防災の問題、それから、あるときにはいじめの問題等ですが、似たようなテーマの人が集まります。チームごとに円たくさんというまるいホワイトボードを車座になって囲み、膝で支え、そして心を寄せてワークショップをスタートします。そこに何人か大学生や地域の人がサポーターとして入りますが、リードしたり、先回りして大人の考えを押し付けたりしないようにします。

地域だからこそリアルな学習ができ、地域だからこそ教科書にない学びができるわけですね。どこにも正解がないことをみんなで考えていく、そのプロセスをNPOはコーディネートをしていきます。

たとえば防災をテーマにしたチームは、小学校の放課後の活動の中で、高校生が防災のワークショップを開催しました。高校生ならではの小学生向けのワークショップを考え、体験的にシンプルに伝えるにはどうしたらいいか、話し合いを重ねました。



また他のチームは高齢者との交流を通して元気なまちにしたいというテーマで動きました。最初は高齢者とお茶を飲む会の開催を考えましたが、果たしてそういうことで来てくれるだろうか、本当につながりができるだろうかと考え、区民祭りでヒアリングをしました。高齢者の方へ、「どんなことなら私たちと一緒にできますか」と問うと、「スマホの使い方、教えてくれるとうれしいな」という答えが返ってきました。「これだ!」ということで、スマホ教室を開催しました。交通機関の検索の仕方や天気予報の見方、LINEの使い方等丁寧に中学生からお年寄りに伝える。これがとても好評でした。そこに携帯電話会社の方が見学にいらして、自分たちは高齢者用のスマホを開発しているけれど、アンケート等で今までリサーチしたものよりも、今日のこの場面のほうが何倍も役に立ったという感想を語られました。

中高生は「市ヶ尾コースプロジェクト」に、「自分の住んでいるまちを良くしたい」「積極的にいろんな人と交流したい」「自分の考えを分かるように伝えられるようにしたい」等さまざまな動機で参加しています。この事業では企業の方や地域の方の話を聞いたり、ワークショップしたりしながら徐々にテーマごとにチームができ、信頼関係を培い、安心して自分を語れるようになります。一人の思いがだんだんつながり、いろんな人と出会うことで、気が付いたり、学んだりする場面を見ていただきたいと思いますし、大学生もその中の一人になっていただき

たいと思っています。

皆さんがここで学べることは、まちづくりにおける世代を超えた交流の重要性であり、協働的にチーム運営する難しさと楽しさです。最初はどういうふうに動いたらいいか、とまどうかもしてませんが、何より大学生はみんなから慕われる存在、あこがれの存在にもなると思いますので、良い関係ができると思います。そして、地域課題の解決や、まちの活性化のプロセスを体験することができます。年間計画を立てたから、うまくいくわけではなく、困った人に出会ったり、困ったことが起こったり、どうしていいか分からないことにぶつかることもあります。そういうときもみんなで知恵を寄せることで、乗り越えたり、小さな成功体験を味わうことができます。子どもがこんなに変わった、地域の人こんなに元気になったということを実感する楽しさもあり、まちづくりの醍醐味を味わうことができます。

また活動を通じてまちづくりやワークショップの専門家、企業の方、行政の方に直接話を聞くこともできます。さらにまちづくりに欠かせない、ファシリテート力、情報収集・発信力、プレゼン力も磨かれます。

ここで、まちづくりにかかわる時、私たちが大切にしたいポイントが3つあります。

まず、地域をつくる時、地縁組織・ローカルコミュニティとともにテーマコミュニティという視点を持つことです。次にまちづくりにはコーディネート機能・中間支援組織の役割が不



可欠だということです。そして最も大事なことは、まちづくりは協働のプロセスだということです。「協働とは、異なった立場の人が、同じ目的のために対等な立場で活動すること」です。小さな子どもの意見も、行政の考え方も、私たちの考え方も異なりますが、それぞれの立場でできることをしていく、行政は行政しかできないことをしますし、企業は企業の強みを活かします。地域の方も自分ができることをしま

す。子どもも大人も、みんながそれぞれの立場でできることをして、協働のまちづくりを大切にしたいと思います。誰もが当事者になる、このまちは私が関わった、担い手であるという社会をつくりたいと思っています。

みなさんは将来行政で、NPOで、企業で活躍されると思いますが、協働のまちづくりをした体験が必ず活きると思います。